

Title	金代における陶淵明の受容
Sub Title	How was Tao-Yuanming accepted in Jin period
Author	高橋, 幸吉 (Takahashi, Kokichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.2 (2009. ), p.63- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0063">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0063</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 金代における陶淵明の受容

高橋 幸吉

## 1. はじめに

南宋と對峙した金朝は北宋の文學思潮を受け継ぎ、金代の詩人たちも陶淵明を重視した。金代詩文の特徴については「蘇軾を通して陶淵明を祖述した」という見方がある。金代詩人が陶淵明に對して少なからぬ關心を示したことは、『全金詩』等の資料から見ても間違いない。元代以前における陶淵明の受容史は、近年李劍峰氏による『元前陶淵明接受史』（齊魯書社、二〇〇二年）が出版され、その文學史的流れが明らかなものとなりつつある。

北宋における陶淵明の受容状況は、先行研究に拠って簡単に整理すると以下のようなものである。北宋初期は多くの詩人が隱者として陶淵明を捉え、唐代以來の見方を踏襲する。その後は梅堯臣が現れて陶詩に平淡の美を見出し、陶詩の解明に新たな一歩を踏み出す。續いて王安石が禪によって陶詩を解釋し、また後世陶淵明の代表作となっている「飲酒」其の五に初めて注目した。そして蘇軾が全ての陶詩に唱和し、その作品を前代の詩人の中で首位

に置いて高く評價し、以降中國文學史上における陶淵明の位置づけは揺るぎないものとなった。また無絃琴や平淡の美についてより踏み込んだ解釋をし、「閑情賦」を評價するなど、陶淵明受容史上に大きな足跡を残した。

金代詩文に對する陶淵明の影響は大きいと言われてきたが、この問題を詳細に論じた研究は未だない。李劍峰氏の著書では金代における受容について二頁弱を費やすのみであり、金詩研究においても元好問の「論詩絶句」の當該箇所について論じたものが有る程度で、金代詩文全體に涉る陶淵明の影響についての考察はない。

このような研究上の空白を埋めるべく、本稿では金代前・中期の陶淵明受容を概観し整理する。そして陶淵明に對してとりわけ多く言及している趙秉文（一一五九―一二三二）と王若虚（一一七四―一二四三）について、陶詩の受容・評價などの面から考察を加える。これによって陶淵明受容史を些かながら補い、また南宋における受容状況と比較することにより、陶淵明受容史上における金代の位置づけ及びその特徴について明らかにしたい。

## 2. 金代における陶淵明受容の概略

〔初期〕建國から海陵王まで（一一一五―一一六一）

金朝建國初期、北宋から金に仕えた官僚たちを中心となつて文學活動を行った。彼らは北宋の文學思潮の影響を受け、しばしば陶淵明及びその作品に言及している。宇文虚中・蔡松年・高士談・馬定國・朱弁・滕茂實など、みな陶淵明に關する典故（以下、中國での略稱に倣い陶典と稱す）の用例がある。だがそれらの多くは用法として典故のコンテキストに忠實であり、典故をそれほどよく消化して用いているとは言い難い。その他には全眞教の開祖王喆も陶典の用例がある。馬鈺・丘處機・劉志淵など、金代中期以降の全眞教道士たちにも陶典を用いた詩文があ

り、彼らも普遍的に陶詩を受容していたと言えよう。

初期の文人の中心は、宋から来て金に留められた人々である。宇文虛中・蔡松年・高士談は金に抑留されて仕官を強要され、朱弁・滕茂實は強要されながらもこれを拒否して、在野にあった。彼らは作品中において自己の境遇に對する悲嘆を度々述べている。このような主題の中で陶淵明に關する典故を用いたとき、その内包するイメージは、複雑なものとなることがある。

鼓角邊城暮 鼓角 邊城の暮

關河古塞秋 關河 古塞の秋

淵明方止酒 淵明は方に酒を止め

王粲亦登樓 王粲は亦た樓に登る

搖蕩傷殘歲 搖蕩して殘歲を傷み

棲遲憶故丘 棲遲して故丘を憶ふ

乾坤尚傾仄 乾坤 尚ほ傾仄

吾敢歎淹留 吾は敢て淹留を歎かん

高士談「秋興」<sup>②</sup>

この詩は陶淵明「止酒」と王粲「登樓賦」を對句として用い、詩は望郷の念を吐露している。「登樓賦」には「舊郷の壅隔を悲しみて、涕橫墜して禁ずる弗し。昔尼父の陳に在りて、『歸らんか』の歎音有り（悲舊郷之壅隔兮、涕橫墜而弗禁。昔尼父之在陳兮、有歸歎之歎音）。」とあり、望郷という主題に沿った典故である。

だが「止酒」は「止」字を全ての句に用いながら、酒をやめることについて述べており、「陶淵明の一時の戯れの言葉であるのか、それとも本當に酒を止めようと思っているのだろうか。先人の理解は一致しない」という作品である。そのため典故としては、本詩の主題にそぐわないように見える。當然ながら本詩中における「止酒」が表しているものは、戯れの言葉でも酒を止めることでもない。主題に即して考えるなら、おそらくは「止酒」の「平生酒を止めず、酒を止むれば情に喜び無し。暮に止むれば安らかに寝ねられず、晨に止むれば起くること能はず（平生不止酒、止酒情無喜。暮止不安寝、晨止不能起）」という詩句が念頭にあると思われる。

作者の高士談も同様に「情に喜び無」く、「安らかに寝ねられず」、「起くること能は」ざるような心理状況にあるのだが、その原因はもちろん、異國に抑留され仕官をせざるを得ない境遇にある。本詩中での「止酒」は、酒を止めるという典故のコンテクストから離れて、胸中の鬱屈や不安を暗示している。「止酒」をこのようなイメージで用いている例はほとんど無い。

宇文虚中が高士談に唱和した詩も、陶淵明の用いた語を用いながら自己の境遇を嘆いている。

沙碧平猶漲 沙は碧く平らかにして猶ほ漲るがごとく

霜紅粉已多 霜紅は粉に已に多し

駒年驚過隙 駒年隙を過ぐるを驚き

晷影倦隨波 晷影波に隨ふに倦む

散步雙扶老 散步す雙つの扶老

棲身一養和 棲身す一つの養和

羞着使者節 羞ぢて見る 使者の節

甘荷牧人蓑 甘んじて荷おふ 牧人の蓑

「高子文の『秋興』に和す」二首 其の一<sup>④</sup>

第五句「扶老」は杖のこと。「歸去來兮辭」に見える語。第六句「養和」は背もたれのある椅子のこと。「散步す双ふたつの扶老」とは、杖をついた老人が二人で散歩するという意味だが、この二人は高士談と宇文虛中を暗喩している。そのため「散步」とは消閑のそぞろ歩きではなく、異國の地で漂泊している彼らの境遇を想起させる。これに對し第六句の椅子に座ってひっそり隱棲している人物は、後述の朱弁を暗喩する。尾聯は蘇武の故事を踏まえている。漢の節を杖にして牧人となり、匈奴に仕えずに節を守った蘇武に比べると、金朝の官服を着た自分は節を枉げた人間であり、自らが宋から帶びてきた「使者の節」を見て慚愧の念を覺えている。これは彼が依然として自身を宋朝の臣として考えており、異民族王朝に信服していないことを表白している。

朱弁の次韻詩も同様に陶典を用いている。

逸興常時有 逸興、常時有り

逢秋一倍多 秋に逢ひて一倍多し

山長含楚雨 山は長く楚の雨を含み

天遠接呉波 天は遠く呉の波に接す

尋壑同元亮 壑かを尋ねて元亮と同じうし

浮家伴志和 家を浮べて志和を伴ふ

釣竿行入手 釣竿 行きて入手し

還著向來蓑 向來こうらいの蓑かみちよに還著かへせん

「子文の『秋興』に次韻す」<sup>(5)</sup>

彼は眼前の風景から故國へと思いを馳せているが、この詩が前述の二詩と異なる點は、高士談や宇文虛中のような慚愧の念を含まないことである。これは朱弁が金朝に仕官しておらず、金の官僚である二人に比べて、心理上の矛盾が少ないことに起因するものであろう。後半四句は陶淵明と張志和をもって、自身の隱逸生活を喩えている。

この三人は元來宋人であり、心ならずも金の領域にいるという境遇はほぼ同じである。金朝に仕える高士談と宇文虛中にとつては、彼らが集まったときにのみ内心を吐露することが出来、朝廷にあつては「淹留を歎」くことは不可能であつた。だからこそ彼らはこの機會に「敢えて淹留を歎」き、故國や故郷を思う心を吐露したのである。このような場合にも陶典を詩中に用いており、金代初期の士大夫層に對して陶淵明詩が大きな影響を與えていたことが窺える。北宋において陶淵明が廣く親しまれたことに加え、彼が東晉・劉宋の王朝交替期を生き延びたことや隱棲して劉宋に仕えなかつたことなど、自分たちの境遇に類似した生涯を送つた詩人だつたからではないだろうか。注目すべきは、遼から金に仕えた張通古にも陶典の用例があることである。<sup>(6)</sup>遼の詩人も陶淵明詩を受容していたという一つの証左たりえるだろう。ただし遼から金に仕えた士大夫は文人としてよりも實務官僚として活躍した人物が多く、詩文の創作もあまり活發ではなかつた。金代前期の詩文は大半が散逸していることもあり、遼人の陶淵明への關心がどれほどであつたのかは詳らかでない。

〔中期〕世宗から衛紹王まで（一一六一―一一二三）

金朝中期になると「國朝文派」が出現し、陶淵明の影響はさらに大きくなっている。この時期の著名な詩人である蔡珪・王寂・黨懷英らには、みな陶典の用例がある。この他にも、『中州集』所收の劉汲・劉迎・田特秀など多くの詩人が陶典を用いている。彼らが用いている典故の多くは「歸去來兮辭」・「飲酒」其の五・「桃花源記」・酒・菊・無弦琴・蓮社など、唐宋の詩人たちがしばしば用いているものであり、新たな典故の開拓や新しい用法の発見に乏しい。用いている陶典は金代初期に比べて多様化してはいるが、これは金代中期の詩文の現存数が初期のそれを大きく上回っていることも考慮せねばならないだろう。以下、幾つか陶典の使用例を挙げる。

山花兩三樹

山花 兩三の樹

笑殺武陵溪

笑殺す 武陵溪

蔡珪「居庸を出す」

ここでは山中の僅か二、三本の木を、一面の桃の花に覆われた武陵溪と對比させている。そしてその武陵溪を「笑殺」するという表現によって、山中に訪れた早春を讀者に強く印象づけ、同時に春を發見した詩人の喜びを充分に表現している。

君不見元亮投名蓮社裏

君見ずや 元亮は蓮社の裏に投名し

不妨更賦閑情賦

更に閑情の賦を賦すを妨げず

黨懷英「楚清之の樂天」『小娃 小艇を撐ぎ、儉かに白蓮を採りて回る。蹤跡を蔵すを解せず、浮萍一道 開く』詩を書き、因りて其の後に題す<sup>(8)</sup>



陶淵明は佛教徒と交流があった一方で、美女に言及した「閑情の賦」を作っている。このことから黨懷英は陶淵明を儒・佛・道に拘泥しない融通無碍な人物と見なしている。この二例における用法は、この時期の用例の中では比較的特色あるものと言えよう。

金代中期の詩人中、最も注目すべきは王寂である。管見の限りでは、現存する二七八首の作品のうち少なくとも二五首は明らかに陶淵明と關連する語を用いている。金代中期の詩人のうちでもっとも多く詩が現存していることを考慮しても、約十一首の一つは陶典を用いており、陶典の使用率は金代中期の詩人の中で突出して多い。彼は「寥寥たり魏晉を閲し、一り陶靖節を得る（寥寥閱魏晉、得一陶靖節）」（張宮師の二疏東歸圖を詠む<sup>9</sup>）と述べ、陶淵明を非常に高く評價している。

王寂が注目したのは陶淵明の隱逸である。一例を挙げると

折腰束帶莫恥五斗粟 折腰束帶五斗の粟を恥ずる莫かれ

猶勝元載胡椒八百斛 猶ほ勝る元載の胡椒八百斛

一朝事敗竟赤族 一朝事敗れて竟に赤族さるるに

「中隱軒に題す」<sup>10</sup>

負郭安得二頃田 負郭安んぞ二頃の田を得ん

有田不歸吾欺天 田有りて歸らざるは吾れ天を欺く

「李致到君の別墅にて鞍を解き少しく駐まる」<sup>11</sup>

と述べている。彼は多くの士大夫と同じように、出處進退の間を徘徊しており、これらの詩句は仕官の道に留まっている自己の立場を辯解しているようにも理解出来る。王叔は白居易を敬慕し、「我は則ち願はくば白樂天を師とし、終身袞袞として司官に留まらん（我則願師白樂天、終身袞袞留司官）」<sup>12</sup>と言つて、詩風も白居易の風格に倣っている。彼の隱逸嗜好に適う詩人として、陶淵明は白居易と並ぶ自己投影的な存在であつたのだろう。白居易のように官僚としての出世と隱棲が両立する生活を理想としつつ、中央の要職に就けない現状を仕官時の陶淵明になぞらえたり、もしくは陶淵明と同じく官を捨てて隱棲したいという希望を吐露している。

その他に注目すべきは、一連の「成趣園詩」である。『大清一統志』によれば、成趣園は「金の梁子直の隱居の地なり。學士黨懷英等詩文有り、其の勝を記す（金梁子直隱居之地。學士黨懷英等有詩文、記其勝）」<sup>13</sup>という場所である。黨懷英・路鐸・張昌祚・酈掖・崔巍・李永安・田時秀・劉仲傑・高延年・李楫・初昌紹・郭安民など十數人の作品が現存している。彼らはみな詩中に陶典を用い、隱逸のイメージを作品に添えている。庭園の名である「成趣」が、「歸去來兮辭」に由来する語であるために、これとの關連で用いているのであろう。この詩題は後に金末元初の詩人たちの興味を引いたようで、これに追和した作も多く、一種の文化現象を形成した。<sup>15</sup>

〔晚期〕宣宗から滅亡まで（一一二二—一一三三—一一三四）

金代晩期の詩人の多くは陶典の使用例があり、そのうち趙秉文・元好問・李俊民・劉從益・段克己・段成己らは使用例が特に多い。

劉從益は四首の和陶詩があり、詩中では多くの陶典を用いている。その他「蘇李合畫『淵明濯足圖』に題す」<sup>16</sup>では一方で陶淵明と蘇軾に觸れながら、一方では哲學的内容を述べている。劉從益の現存作品はわずか四十五首に

過ぎないが、このうち五首が陶淵明に關連する。現存作品のうち、偶然陶淵明に關する作が残った可能性はあるが、彼が陶淵明に對して何らかの關心を持つていた傍証と見ても良いだろう。

李俊民には二十數カ所の陶典使用例があり、「集中は元に入りて後ち只だ甲子を書くのみにて、隱然と自ら陶潜に比す（集中入元後只書甲子、隱然自比陶潜<sup>17</sup>）」と評されている。ただし彼が注目したのは、やはり陶淵明の隱逸的側面が中心である。彼の詩文は「幽憂激烈の音多し（多幽憂激烈之音<sup>18</sup>）」と言われているが、陶典を用いた作品にはこのような内容のものはなく、平明で穏やかなものとなっている。

段成己・段克己兄弟も陶典の使用例は多く、中には詩會で陶淵明の詩句を韻として詩を作っている例もある<sup>19</sup>。

以上、金朝一代を通じて陶淵明への關心が高かったことが確認できた。全體的に見て、その詩を論じたり人物像を考察したりすることは少なく、隱逸詩人としてのイメージで語られている。その隱逸の背後にある思想や、表現内容について審美的角度からの解釋に乏しい。そして金代文人が隱逸詩人陶淵明に言及するとき、その捉え方は二つに大別できると思われる。一つは官を捨てた高潔な隱者としての陶淵明で、科擧や官僚生活における自らの不遇を陶淵明の生涯と重ねて詩文に吐露するという傾向である。もう一つは、王朝交替期のさなかに隱棲して節を守った人物としての陶淵明である。これは金代前期には北宋から仕えた文人が、金代後期以降には遺民としてモンゴルに仕えなかつた人々が、自己の境遇を投影して作品中に用いている。

### 3. 趙秉文の和陶詩

金末文壇の領袖趙秉文（一一五九～一二三二）は、陶淵明に對してとりわけ強い關心を示している。そして隱逸で側面ではなく、詩人としての側面に學ぼうとした姿勢は、前節で概観した金代文人の傾向とは異なっている。彼には「淵明の『擬古』に和す」九首・「淵明の『田園居に歸る』に和し潘清容に送る」六首・「淵明の『飲酒』に和す」二十首<sup>22</sup>という和陶詩があり、他にも「擬陶 許至忠に和す」二首・「東籬採菊圖」・「淵明の自廣に倣う」<sup>23</sup>など、陶淵明に關する題名の作品がある。元好問は趙秉文の墓銘のなかで、彼の詩風を「五言は則ち沈鬱頓挫なること阮嗣宗に似、眞淳古淡なること陶淵明に似る（五言則沈鬱頓挫似阮嗣宗、眞淳古淡似陶淵明）」と評しており、陶詩が彼に與えた影響は大きい。

趙秉文の陶淵明に關する作品を見ると、陶淵明の詩風を模倣しようとしている部分が、明らかに見受けられる。例えば「淵明の『擬古』に和す」九首は、陶淵明「擬古」九首の用語・構成・主題などを模倣している。第一首においてはこの傾向が非常に顕著で、冒頭の「亭亭たり澗底の松、婉婉たり窓前の柳（亭亭澗底松、婉婉窓前柳）」は、「擬古」其の一の冒頭「榮榮たり窓下の蘭、密密たり堂前の柳（榮榮窓下蘭、密密堂前柳）」と、句の組み立てが全く同じである。

その中で第二首は邊塞へと赴く兵士をモチーフにしており、他の八首とは少々趣を異にする。

停杯且勿飲 杯を停めて且つ飲む勿かれ

劔歌已三終 劔歌已に三たび終はる

男兒重意氣 男兒は意氣を重んじ

結髮早從戎 髮を結ひて早や戎に従ふ

生當爲世豪 生きては當に世の豪たるべし

死當爲鬼雄 死しては當に鬼の雄たるべし

ここで取り上げたのは前半部分であるが、内容は陶淵明よりもさらに雄壯である。元の陶詩は後漢末の田疇の故事に言及し、「田子春有るを聞く、節義は士の雄たり。……生きては高き世名有り、既に没して傳はること窮まり無し（聞有田子春、節義爲士雄。……生有高世名、既没傳無窮）」と、その節義を詠う。これに對して趙の詩は句の構造や用語についてもとの詩に拘泥せず、雄壯なイメージを平易な表現で描寫して、この一首のみ陶詩の風格をあまり踏襲していない。前述のように、金代詩人は一般に陶淵明の隱逸的側面に注目し、「詠荊軻」などの作品に關心を示さず、陶詩の豪放な側面にはほとんど注目していない。趙秉文のこの詩は陶詩を模倣したに過ぎないとはいえず、金代詩文のなかで陶淵明の豪放な一面を模倣した数少ない例であり、陶詩には隱逸や平淡の美以外の面があることを示唆している。陶詩を多様な觀點から眺めていたという點において、趙秉文の理解は他の金代文人に比べより深いものであったと言えるだろう。

「淵明の『田園居に歸る』に和し潘清容を送る」六首は陶詩を韻として作った贈答詩である。この詩では

身行半天下 身は天下の半ばを行き

何處無名山 何處にか名山無からん

蘇門天下勝 蘇門は天下の勝

築室不待年 室を築きて年を待たず

曩時孫公和 曩時の孫公和

今代潘子淵 今代の潘子淵

「淵明の『田園居に歸る』に和し潘清容を送る」其の一

と述べており、恐らく潘清容なる人物は漂泊の後に蘇門山にたどり着いた隠者なのだろう。詩中では陶典を多用し、潘清容を悠々不迫とした隠者のイメージで描いている。この當時すでにモンゴルの南下が始まっており、詩中では「山川半ば豺虎、一水前むことを得ず（山川半豺虎、一水不得前）」（其の一）、「萬國角聲の裏、日暮れて行旅稀れなり（萬國角聲裏、日暮行旅稀）」（其の三）など金末の戦亂を暗示する描寫もある。だがこのような描寫は多くはなく、表現も婉曲で、蘇門山の平穩な風景と強烈な對比を生み出すまでには至っていない。

「淵明の『飲酒』に和す」二十首は、陶淵明「飲酒」二十首と同じく、人生觀や世情の転変に對する感慨など、哲學的内容を中心としている。だが一連の詩全てが抽象的内容に終始しているわけではなく、「耳聾へ左目は盲ひ、決去 吾は何をか疑はん（耳聾左目盲、決去吾何疑）」（其の十二）、「眼は花みて文字を憎み、悠悠 竟に成ること無し（眼花憎文字、悠悠竟無成）」（其の十六）と、自己の老境についても具體的に言及している。これら抽象と具象、一般性と個別性の對比を通じて、生・老・病などに關する思いが讀者に實感として傳わりやすくなり、表現として成功しているといえるだろう。また一方では、其の二・七・十二・十五・十九で往時を回顧し、この詩全體が趙秉文の自傳的要素を有する、複雑な構成となっている。

その他に注目すべきは、陶淵明の飲酒という行爲に對する、趙秉文の解釋である。

淵明非嗜酒　淵明は酒を嗜むに非ず

愛此醉中眞　此の醉中の眞を愛す

謂言忘憂物　忘憂の物と謂言ひ

中有太古淳　中に太古の淳有り

「淵明の『飲酒』に和す」其の二十

陶淵明は同時代からすでに飲酒のイメージと深く結びついていたが、その飲酒の意味を解釋したものは多くはない。さらにその解釋は彼の洒脱な人物像の一端として、飲酒を捉えているものが多い。古くは蕭統が「吾れ觀るに其の意は酒に在らず、亦た酒に寄せて迹を爲す者なり（吾觀其意不在酒、亦寄酒爲迹者也）<sup>(25)</sup>。」と評し、單なる飲酒以上の意味を認めたが、その内實にまでは言及していない。その後は王績が「醉郷記」で理想的な境地として解し、李白・白居易らはこれに加えて憂いや孤獨を解くものとしても解した。趙秉文は陶淵明の飲酒を、一種の哲學的行爲と見なしている。陶淵明は酒を飲み、酔うことによつて、そのなかにある本性の「眞」を獲得する。それは憂いを忘れるという消極的効能だけでなく、太古の人間の純樸さに通じる状態になる。このような解釋は、蘇軾の「遇ふ所に安んじて之を樂しむこと終身なるは、淵明の眞に庶幾<sup>ちか</sup>からんや（安於所遇而樂之終身者、庶幾乎淵明之眞也）<sup>(26)</sup>。」という評がその先例としてある。趙秉文は飲酒と「眞」とを結びつけ、「淵明飲酒」に對する解釋をさらに深めたとと言えるだろう。

全體的に見て、趙秉文の和陶詩は陶詩を參考としつつも彼自身の作風を保ち、時に人生哲學を展開したり平明な

風景を詠ったりと、ほぼ成功を収めている。だが詩歌の技巧という角度から見た場合、典故の消化が充分ではなく、詩中に陶詩の詩句やモチーフがあからさまに出現する。彼と同時代の人間が、その詩を評して

趙の詩は古人の語を犯すこと多く、一篇に或は數句有り、此れ亦た文章の病なり。屏山嘗て其の『閑閑集』に序して云ふ、「公の詩は往往にして李太白・白樂天の語有り、某輒それかち能く之を識る」と。(趙詩多犯古人語、一篇或有數句、此亦文章病。屏山嘗序其『閑閑集』云、「公詩往往有李太白・白樂天語、某輒能識之。」)

と言っているが、彼らが指摘しているのは、趙秉文には典故の消化が不足しているという欠点である。このことは陶淵明の受容にも現れていると言えよう。

#### 4. 陶淵明受容史上における王若虚の功績

金末の學者王若虚(一一七四～一二四三)の陶淵明に對する見方は、その他の金代詩人と異なる觀點に立っている。彼は金代に通行していた『陶淵明集』所收の「歸去來兮辭」を『晉書』・『宋書』所收のそれと校勘し、通行本の字句や句讀の切り方を改めるよう提言している。<sup>(28)</sup> また蘇軾の和陶詩に對して独自の見解を示している。

東坡和陶詩、或は其れ終つひに近からずと謂ひ、或は以て實まことに之を過くと爲す、是れ皆みな當に論ずるべき所には非ざるなり。渠かれは亦た彼の意に困り、吾が意を見あらすを以て云ふのみ。ぞ嘗て心を競べて其の勝劣を較べん



や。故に但だ其の眼目旨趣の何如を觀れば則ち可なり。(東坡和陶詩、或謂其終不近、或以爲實過之、是皆非所當論也。渠亦因彼之意、以見吾意云爾。曷嘗心競而較其勝劣邪。故但觀其眼目旨趣之何如則可矣。)

『滄南遺老集』卷三十九

王若虛は陶淵明詩と蘇軾の和陶詩との優劣を論ずることに反對している。なぜなら陶詩は蘇軾の創作意識を觸發したに過ぎず、蘇軾は陶詩に和韻しながら自己の胸中を表現したもので、陶詩と優劣を競おうということは念頭がない。兩者の優劣を論じることの意義は小さく、もつとも重要なのは陶・蘇の詩風の違いを理解することである。このような提言は非常に建設的であると言えよう。だが事實として、王若虛自身の心中には兩者の優劣が確實にあり、蘇軾の和陶詩は陶淵明詩に比肩し得ないとしている。彼は「歸去來兮辭」を非の打ち所のない完璧な作品と見なしており、蘇軾の和陶詩を「近俗」であると批判している。

「歸去來辭」は本と是れ一篇の自然眞率の文字、後人の模擬するは已に自と宜しからず、況んや其の韻を次ぐ可けんや。次韻すれば則ち牽合して類ざるなり。(「歸去來辭」本是一篇自然眞率文字、後人模擬已不宣、况可次其韻乎。次韻則牽合而不類矣。)

同書卷三十四

東坡は「歸去來辭」を酷愛し、既に其の韻に次し、又た衍げて長短句と爲し、又た裂きて集字詩と爲し、破碎甚し。陶文は信に美、亦た何ぞ必ずしも爾るや。是れ亦た未だ近俗たるを免れざるなり。(東坡酷愛「歸去來辭」、既次其韻、又衍爲長短句、又裂爲集字詩、破碎甚矣。陶文信美、亦何必爾。是亦未免近俗也。)

次韻・和韻は金代中期以降盛んであった。これに對して王若虛は詩における韻というものを、次のように比喻している。

詩の韻有るは、風中の竹・石間の泉・柳上の鶯・墻下の蛩こほろぎの如く、風行けば鐸鳴り、自づと音響を成す。豈に擬議を容れんか、笑ひて呵呵、歎じて唧唧しよくしよく、皆な天籟なり。(詩之有韻、如風中之竹、石間之泉、柳上之鶯、墻下之蛩、風行鐸鳴、自成音響。豈容擬議夫、笑而呵呵、歎而唧唧、皆天籟也。) 同書卷三十九

故に次韻・和韻は詩歌の本道とは言えず、「近世唱和は皆な其の韻を次ぎ、復たとは眞詩有らざるなり(近世唱和皆次其韻、不復有眞詩矣)」と述べている。このような發言を總合してみると、王若虛は陶詩に次韻・和韻することを、意義が小さいだけでなく、詩歌の「天籟」を損なうものであると捉えている。

前述の引用文中の「長短句」とは、蘇軾の「哨遍」などの詞を指している。これは「歸去來兮辭」を主題としながら、詞中に陶詩の語句を多用した作品である。また「集字詩」とは、「歸去來集字」十首を指している。蘇軾はこれらの方法を試すことで、陶詩の風格を模倣しながら、新たな作品を作り出そうとしたのである。だが王若虛にとっては、どれもみな「近俗」な行爲であり、批判の対象であった。

では王若虛自身は詩歌の創作において、陶淵明からいかなる影響を受けているのであろうか。現存する彼の詩はわずかに四十六首で、その中から陶詩の明らかな影響を見出すことは難しい。詩歌作品の中では、「淵明歸去來圖

に題す」<sup>(31)</sup>五首が陶淵明を扱っている。この詩は通常の題畫詩とは趣を異にし、實際の畫面に言及することはほとんど無く、畫題を契機に陶淵明の人物や作品に對する評價を主題にしている。

靖節迷途尚爾賒 靖節途に迷ひて尚ほ爾は賒し

若將覺悟向人誇 覺悟を將て人に向ひ誇るが若し

此心若識眞歸處 此の心若し眞の歸處を識らば

豈必田園始是家 豈に必ずしも田園始めて是れ家ならんや

「淵明歸去來圖に題す」其の一

陶淵明とは一切を達觀した隱者ではない。その前半生は出處進退に迷い、悟るところが有ればこれを言語化して詩に残し、他者にことさら誇っているかのようなのである。陶淵明がもし眞に依るべき所を知っていたならば、どうして田園だけがその居所となるだろうか。同様の見方は朱熹も述べている。

陶淵明は萬千の言語を説盡し、富貴は要らず、能く貧賤を忘ると説くも、其の實是れ大いに忘るる能はず。  
(陶淵明説盡萬千言語、説不要富貴、能忘貧賤、其實是大不能忘。) 『朱子語類』卷三十四「述而篇」<sup>(32)</sup>

以降同様に陶淵明の詩句や事跡を取り上げ、これに疑問を投げかけていく。

孤雲出岫暮鴻飛 孤雲 岫を出で 暮鴻飛ぶ

去住悠然兩不疑 去住悠然 兩つながら疑はず

我自欲歸歸便了 我自<sup>みづか</sup>ら歸るを欲せば歸りて便ち了ぬ

何須更說世相遺 何ぞ須く更に説きて世に相ひ遺さんや

同其の二

第一句は「歸去來兮辭」にある「雲は無心にして岫を出、鳥は飛ぶを倦みて還るを知る（雲無心而出岫、鳥倦飛而知還）」という句を元になっている。雲や鳥は行くも戻るも迷いなく融通無碍であると、陶淵明自身が詠っているのだから、それと同じように田園に歸りたければ歸るだけのこと。どうしてその心情を「歸園田居」としてわざわざ作品にし、後世に残したのだろうか。

抛却微官百自由 微官を抛却し 百自由<sup>もうちゆう</sup>たり

應無一事挂心頭 應<sup>まさ</sup>に一事の心頭に挂ること無かるべし

銷憂更借琴書力 憂<sup>うれ</sup>ひを銷すに更に琴書の力を借る

借問先生有底憂 借問す 先生は底<sup>な</sup>の憂いをか有らんやと

同其の三

そして官を辭めて念願の隱棲生活に入ったにも関わらず、それでもなお心中の憂いに言及し、これを消すために琴や書物の力を借りる。一體あなたには何の憂いがあるのか。

得時草木竟欣榮 時を得て草木は竟に欣として榮え

頗爲行休惜此生

頗まぶさる行休を爲して此の生を惜しむ

乘此樂天知浪語

此に乗じて樂天は浪語なるを知る

看君於世未忘情

君の世に未だ情を忘れざるを看る

同其の四

第四首の前半では「木は欣欣として以て榮に向かい、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善しとし、吾が生ゆくの行休するを感ず（木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善萬物之得時、感吾生之行休）」という句を踏まえる。「行休」とは生命の終わり。四時の巡りを眺めながら自らの余命を惜しみ、生に執着している様子が見いだせる。第三句は「聊いささか化に乗じて以て盡くるに歸し、夫の天命を樂しみて復た奚なをか疑わん（聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑）」という句を踏まえる。いずれも「歸去來兮辭」の一節である。生死を達觀して天命を樂しむという姿勢は表面的なものであるとし、王若虚の眼光は陶淵明の作品の端々から、世の中への未練を讀み取っている。

名利醉心濃似酒

名利は心を酔はしめて濃きこと酒に似

貪夫袞袞死紅塵

貪夫 袞袞として 紅塵に死す

折腰不樂飜廻去

折腰 樂しまず 飜ひるがえりて廻り去る

此老猶爲千載人

此の老 猶ほ千載の人爲り

同其の五

第五首では陶淵明の官を辭した行動についてある程度の評價を與えている。名聲や利益というものは人を酔わしめ、強欲な人間はこれを追求するものである。だが陶淵明は簡單に官位を棄てて田園に戻った。これは歴史上稀な、

高潔な人物であると言える。

第一首から第四首までの陶淵明に對する疑問は、故意に彼を攻撃しようとしているかのようであり、王若虚特有のからかうような口吻も感じられる。王若虚は「歸去來兮辭」の詩句を引用しつつ「何ぞ須く更に説きて世に相ひ遣さんや」と批判しているが、陶淵明が悟りを言語化せずにひっそりと隠棲していたならば、「一篇の自然眞率の文字」たる本作品は生まれなかった。では王若虚の陶淵明に對する評價は低いのであるうか。前述のように、彼は陶淵明の文學作品を高く評價している。それに對してこの詩で疑問を提起しているのは、陶淵明の隱逸態度についてであり、作品と人物とを區別して評價していると見てよいであろう。そしてその人物に對する評價も決して低いものではない。官位を簡単に棄てた行爲を評價して、「此の老猶ほ千載の人爲り」と評している。<sup>(33)</sup>

この結論は朱熹の評價と軌を一にする。朱熹は官を棄てた陶淵明の清廉さを高く評價し、この點を以て晉宋において抜きん出た人物であると認めている。<sup>(34)</sup> 王若虚は朱熹の著作を讀んだ形跡があるので、この詩は『朱子語類』成立（一二七〇年）以前のものであるが、何らかの形でその文章を目にしていた可能性は否定できない。<sup>(35)</sup> 朱熹の發言が念頭にあったのか、それとも暗合なのかは斷定しがたいが、王若虚の陶淵明評價は朱熹の言説を基本的に踏襲している。

では一體この詩の意圖は何なのであろうか。陶淵明への批判は朱熹に比べて詳細であり、少々執拗に過ぎる感もある。批判している對象は、恐らく陶淵明自身の人格・行爲ではなく、當時の人々の陶淵明に對する評價や抱いていたイメージではないだろうか。金代の人々は陶淵明の文學作品と、彼の人生態度を混同してこれを評價し、その隱逸の側面をあまりに重視するが故に、隱士としての陶淵明のイメージが、その實態と乖離して美化されていった。

例えば既に先行研究に指摘があるように、陶淵明は作品中にしばしば「運るに委ね」「盡くるに歸す」ことに言

及するが、彼本人は常にこのような態度を堅持したわけではない。<sup>36</sup>むしろこれを理想としつつも、なかなか實現するには至らなかったのである。もしも陶淵明が眞の隱士なら、彼はきつと現實社會に對して關心を持たないし、詩文を以て心中のわだかまりや憂いを表現する必要もない。そして、後世かくも人々の注目を浴びることは無かつたであろう。第四首において、王若虛は陶淵明文學中の隱逸趣味に對して、「浪語」と明らかな批判の言葉を向けている。王若虛の意圖は、あまりに肥大化した陶淵明の隱逸のイメージを修正することであり、陶淵明の實像を顕わにしようとしたものではないだろうか。

陶淵明の理想化は十二〜十三世紀の中國において南北共通の風潮であつた。このような風潮のもとで王若虛の評論は少なからぬ意義を持ち、陶淵明受容史の上でも特異な位置を占めている。だが惜しむらくはこのような觀點を、元代の詩人・學者はほぼ繼承しなかつたのである。

## 5. 陶淵明の受容における南北の差異

北宋では蘇軾以降も、詩人や學者たちが絶えず陶淵明を研究して新しい側面を發掘し、解釋を積み重ねてその理論化を圖つた。金朝と對峙した南宋では、北宋における陶淵明愛好の風潮を受け継いだばかりでなく、引き續き様々な角度から陶淵明を読み解いた。例えば彼らは陶淵明の豪放な側面を諸葛亮になぞらえ、「英雄」的な性格の人物であるときえ見なした。<sup>38</sup>また理學の觀點から彼の人格を位置づけて、歴史上稀に見る特殊な人格者として確立したり、心學の觀點から彼の人品と詩品との整合性を導き出したりもした。<sup>39</sup>

これに對して金代詩人の陶淵明に對する理解は隱逸の側面に偏り、南宋のような多様な解釋は見られなかつた。

これには幾つかの原因が考えられる。

金代の士大夫は一般に隱逸を重視する傾向が強い。金朝建國時より一貫してこの風潮が見られる。金代初期においては拘留され仕官を余儀なくされた北宋系官僚が、隱逸を望んでも實現出来ない状況において、その心情をたびたび詩文に吐露した。中期以降は官途の挫折などの理由で隱逸生活を望むものが多く、その一部は實際に官を退いて隱逸生活を実践した。官途の挫折は金朝に限らず、唐代や北宋の士大夫でも一般に見られることであるが、金では少数民族政権という特殊な事情も關係するだろう。金初と金末の一時期を除いては、政治の中樞は女眞人と契丹貴族が占めていた。そのため科擧によって官途への門戸が開かれていたとはいえ、大臣クラスにまで昇りつめることは難しかった。漢人の知識層は經世濟民という理想を充分には實現できず、さらには民族政策などの要因により官途が狭まっていた。<sup>40</sup>望むような立身出世が叶わず、また南宋のように市井の知識階層として生きていく社會的背景がほとんど存在しない状況において、隱棲とは傳統的士大夫の採るべき有力な選択肢であったのではないだろうか。<sup>41</sup>このような風潮の元で、彼らが陶淵明を隱逸詩人の典型と見なし、その他の側面を輕視したのは無理からぬことであろう。

もう一つの特徴としては、王朝交替期に生きる胸中を語る題材として陶淵明に言及するという類型が擧げられる。金代初期の北宋系士大夫や、蒙元初期の金の遺民がこのスタイルで陶淵明を受容し、南宋滅亡後は宋の遺民が同様のことを行う。だがこれも結果として隱逸を志向し、隱逸という範疇から出るものではないだろう。

陶淵明の人品・詩品に關する論理的な解釋は、理學と心學の果たした役割が大きい。この二つの學問は宋代に興り、いわば彼らは當時最新の學術理論をもって、それ以前の陶淵明に對する理解を塗り替えたのである。だが理學が金朝に流入したのは金代後期であり、このとき金朝は既に危殆に瀕して、士大夫たちがこれを充分に吸収す



る前に金朝が滅亡してしまった。故に陶淵明の人品・詩品に對する金代文人の評價は、理學以前の傳統的思考方法にのっとり、片言隻語によって自己の直感を述べるに過ぎない。例えば元好問はこの問題を「眞淳」という語でもって解釋しようとしたが、理學者・心學者ほどは人品と詩品とを論理的にまとめ上げることができなかった。金代における陶淵明の受容は、幾つか新しい見方が提示されているものの、大局的に見ると革新的な發見も少なく、南宋に劣っていることは否めない。このように、陶淵明の受容態度における南北の差異は、兩國における社會的背景と學術的背景の違いに根ざすものであると言えよう。

だが文學史の流れから見ると、金代における陶淵明の受容狀況は、意義が小さいとは言いつてもいい。既に先行研究に指摘があるように、元代では文人の隱逸嗜好が流行した。金代における陶淵明の受容態度は、元における隱逸嗜好の先駆であり、「隱逸詩人」のイメージへと画一化し始めた時期であると見なすことが出来るだろう。

本稿では觸れなかったが、元好問における陶淵明の受容も、他の金代詩人と基本的立場は変わらない。だが詩人陶淵明に對する評價とその内面性に關する考察は、從來の理解をさらに推し進め、人品と作品創作の關連性を考察している。この問題については稿を改めて論じたい。

## 注

- (1) 例えば前野直彬編『中國文學史』（東京大學出版會、一九七五年初版）など。
- (2) 『全遼金詩』第一七三頁、閻鳳梧・康金声主編、山西古籍出版社二〇〇一年版。
- (3) 『陶淵明集校箋』第二五四頁、龔斌校箋、上海古籍出版社一九九九年版。
- (4) 『全遼金詩』第一二二頁。

- (5) 『全遼金詩』第一五五頁。
- (6) 「命按山東路因遊靈巖」に「淵明能止酒、叔夜況携琴」とある。『全遼金詩』第一二九頁。
- (7) 『全遼金詩』第五四〇頁。
- (8) 『全遼金詩』第七四五頁。
- (9) 『全遼金詩』第五四五～五四六頁。
- (10) 『全遼金詩』第五六二頁。
- (11) 『全遼金詩』第六二〇～六二二頁。
- (12) 「題中隱軒」、『全遼金詩』第五六二～五六三頁
- (13) 『大清一統志』卷十五「河間府」、『四庫全書』本。
- (14) 耶律楚材「和黃華老人題猷陵吳氏成趣園詩」(『湛然居士集』卷一)によると王庭筠にも「成趣園詩」があつた可能性が高い。ただし耶律楚材が詠つたのは猷陵吳氏の庭園であり、梁氏の成趣園とは、同名異所のようである。
- (15) 例えば元好問「虞鄉麻長官成趣園」二首、耶律楚材「和黃華老人題猷陵吳氏成趣園詩」などがある。
- (16) 『全遼金詩』第二一六三頁。
- (17) 『四庫全書總目提要』、『莊靖集』提要。
- (18) 同前。
- (19) 「九日山園小宴取五柳公採菊東籬下爲韻賦詩侑觴」、『全遼金詩』第二八四二頁。
- (20) 『閑閑老人滄水文集』卷四、『四部叢刊』本。
- (21) 同前書卷四。陶淵明「歸園田居」は全五首であるが、趙秉文は江淹「雜題詩」三十首中の「擬陶徵君田居」を陶詩と誤認しているため、六首となっている。
- (22) 同前書卷五。
- (23) 以上、全て同前書卷五。

- (24) 元好問「閑閑公墓銘」。姚奠中主編・李正民增訂『元好問全集』（增訂本）、山西古籍出版社、二〇〇四年版、第四〇三～四〇四頁。
- (25) 蕭統「陶淵明集序」。
- (26) 蘇軾「書李簡夫詩集後」。
- (27) 『歸潛志』卷八。中華書局一九九七年版。
- (28) 胡傳志・李定乾校注『潯南遺老集』卷三十四、遼海出版社、二〇〇六年版。
- (29) 同前書卷三十九。
- (30) 鄒同慶・王宗堂校注『蘇軾詞編年校注』第三八八～三八九頁、中華書局、二〇〇二年版。
- (31) 『潯南遺老集』卷四十五。
- (32) 中華書局、一九九九年版。
- (33) 王若虛の人物批評の基準が高すぎる、とも言えるだろう。彼の論法に従って言えば、出処進退が自由自在で、悟りを言語化することなく隠逸できる、さらには田園に限らずどこでも隠棲できる人物が最も評価される。朱熹は陶淵明との比較において顔回を想定しており、これに次ぐ人物として陶淵明を位置づけている。
- (34) 「晉宋間人物、雖曰尚清高、然箇箇要官職、這邊一面清談、那邊一面招權納貨。淵明却眞箇是能不要、此其所以高於晉宋人也。」（『朱子語類』卷三十四「述而篇」）
- (35) 王若虛はその著『潯南遺老集』の中で、朱熹の発言に三十三箇所引用している。拙論「王若虚の經學と金代蘇學」宋代詩文研究会『橄欖』第十四號、二〇〇七年）末尾別表参照。
- (36) 羅宗強『玄學與魏晉士人心態』第四章第五節「陶淵明・玄學人生觀的一個句號」、南開大學出版社二〇〇三年版。
- (37) 例えば黄庭堅「宿舊彭澤懷陶令」に「凄其望諸葛、抗讎猶漢相」とあり、辛棄疾〔賀新郎〕に「看淵明風流、酷似臥龍諸葛」とある。
- (38) 陳與義「題酒務壁」に「當時彭沢令、定是英雄人」とある。

- (39) 李劍峰『元前陶淵明接受史』第四編第一章第三節「理學家與陶淵明典範地位的確立」參照。
- (40) 女眞進士科は漢人の受験する詞賦科や明經科に比べて合格率が非常に高かった。これは女眞貴族の子弟が受験するものであり、政策論を科された。これに対して漢人には金代後期まで策論を科されることはなく、つまりは政策立案能力は期待されていなかった。
- (41) 金では南宋のような、都市生活を行う在野の知識人層が形成されなかったとされる。章宗期以降は都市經濟の發達により、大都市には在野の知識人層が形成され、彼らが院本の創作を担ったが、おそらくは非常に稀な存在であった。そうすると科挙に及第できなかった漢人は元徳明（元好問の父）のように隱棲し講學するか、王渥のように胥吏として役所に勤めるか、何らかの契機に僧や道士になるか、という選択肢しかない。元好問の詩に抛れば、金末には下級官吏と在野の知識人による詩社も存在したようだが、その狀況はほとんど分からない。
- (42) 元好問「論詩絶句」三十首其の四「一語天然萬古新、豪華落盡見眞淳。」『元好問全集』第二六九頁。
- (43) 蕭麗華『元詩之社會性與藝術性研究』（國家出版社、一九九八年）・楊鎌『元詩史』（中華書局、二〇〇三年）等參照。
- 「元代詩文における隱逸嗜好」は、斯界ではまだ共通認識とされるほど多くの研究事例があるわけではない。異民族王朝下において詩文が隱逸を嗜好するという傾向は、今後研究すべき課題であろう。

